インドネシア国軍（ＴＮＩ）人脈と「二重機構」

インドネシア国軍（ＴＮＩ）は国防機能とともに領域機能（従来の「政治・社会機能」）という「二重機能」を担ってきたが、地元マスコミはこれを捩って最近の国軍には「二重機構」もあると皮肉っている。ワヒド大統領を最高司令官、ウィドド海軍大将を制服組のトップ（国軍司令官）にする「表」の指揮系統と、ウィラント元調整相ら陸軍の旧「主流派」が影響力を行使する「裏」の指揮系統のことだ。大統領は政権に対する国軍の政治的な支持を確保するために、ここに来てこうした実態との妥協を余儀無くされている。

大統領と国軍の「チェス・ゲーム」

ワヒド大統領は10月９日、ティアスノ・スダルト陸軍参謀長を解任し、後任にエンドゥリアルトノ・スタルト陸軍参謀次長（［人物データ・ファイル］参照、以下《ｐ》）を昇格させた（注１）。これは大統領にとっては国軍の多数派勢力に屈辱的な妥協を強いられた人事だった。大統領は参謀長候補として国軍改革派のリーダー、アグス・ウィラハディクスマ前陸軍戦略予備軍（Kostrad）司令官（現陸軍司令部付）《ｐ》を強く推していたが、多数の将官が同中将の起用を断固阻止する動きを見せたため、断念せざるをえなかったのだ。

ワヒド大統領と国軍とのこのような関係は、人事異動という「用兵術」を駆使して国軍改革を推進しようとする前者と、政治・経済的な既得権益を守るために応戦する後者との「チェス・ゲーム」（戦略国際研究センターのクスナント・アンゴロ氏）の様相を呈している。確かに、今年２月に政・軍界の実力者、ウィラント政治・治安担当調整相（当時）を「停職処分」に追いこみ、その直後にアグスWK中将を Kostrad 司令官に就任させた頃の大統領は攻勢に出ているかに見えた。しかし、７月末にアグスWK司令官の更迭を容認せざるを得なくなってから今回の人事に至るまでの大統領は明らかに守勢に立たされている。大統領はちょうど１年を経過した自らの政権に対する国軍の政治的支持を確保するために、守旧派、中間派、改革派の勢力バランスに配慮する必要に迫られているのだ。こうした経緯と現状を国軍内各勢力の人脈との関連で図式的に概観すると次のようになる。

「守旧派」と「中間派」

【守旧派】スハルト体制下で大統領の警護隊長や副官など国軍の中枢にあった勢力を継承している。現役組では国軍士官学校（Akabri）を1970年前後に卒業した将官が多く、国軍将校の20－30％を占める。現在は組織上の要職にはないが、旧体制時代からの人的関係や政治・経済的権益を保持し、地方軍管区の多くに対し影響力を行使できる。これが「裏」の指揮系統だ。代表的な現役軍人としては、スバギヨ大将（元陸軍参謀長：現国軍司令部付）、ジャジャ・スパルマン中将（国軍参謀学校長）、スアイディ・マラサベシ中将（前国軍軍務担当参謀長：現国軍司令部付）、スディ・シララヒ少将（ブラウィジャヤ軍管区司令官）、スドゥラジャット少将（前国軍報道官）。

ウィラント元調整相（退役大将：元国軍司令官）は同派の実質的なリーダーであるが、元来は守旧派というよりは国軍各派の「調整役」を担ってきた。それもあり、現政権成立以前は「ウィラント派」ではなかったが、ワヒド大統領によって要職から外されたために現在では同大将との連携を深めている将官たちもある。ファクルル・ラジ大将（９月に国軍副司令官を解任）、シャフリル・シャムスディン少将（陸軍参謀長作戦担当補佐官）らの現役軍人とザッキー・アンワル退役中将（元国軍情報局長）がこの範疇に入る。その多くがスハルト政権時代はウィラント大将の「政敵」、プラボウォ元中将（スハルト元大統領の娘婿：元 Kostrad 司令官）に近かった将官たちだ。また、守旧派には特殊部隊や諜報機関を通して作り上げてきた人的ネットワークがあり、「裏」の指揮系統の末端には地方の紛争地域で暗躍するイスラム教過激派組織や「ならず者集団」が含まれているのは公然の秘密になっている。

一方、陸軍参謀長を解任されたばかりのティアスノ大将（現国軍司令部付）もスハルト元大統領に近いという意味では守旧派に入るが、ウィラント大将とはソリが合わない。一時期には「反ウィラント」の立場からアグスWK中将ら改革派と連携するポーズもとったが、最近は同派から距離を置いていた。参謀長解任の直接の要因として、東ティモール併合派武装組織の資金調達のために偽札製造を軍関係者に指示した疑惑が指摘されている。しかし、ティアスノ大将の場合は野心家の「オポチュニスト」だとして、他の国軍幹部の反発を招いたことも背景にありそうだ。

【中間派】国軍将校の60－70％が同派に属し、現在の国軍の要職を占めている。「二重機能」の早期解消を含む国軍改革は段階的に進めることを主張し、経済的な既得権益も守りたいとの本音が垣間見える。良くいえば「穏健改革派」。大きく２つのグループがある。

一つは「職業軍人」タイプで、実戦部隊において豊富な経験を積んできた将官たち。政治的な旗幟は鮮明にしない。その典型がエンドゥリアルトノ新陸軍参謀長だ。その他には、リャミザルド・リャチュドゥ中将（Kostrad 司令官）、ジャマリ・チャニアゴ中将（国軍軍務担当参謀長）、キキ・シャナクリ少将（ウダヤナ軍管区司令官）。ウィドド国軍司令官（海軍大将）もこのグループに入れてよいだろう。軍人

としてのプロフェッショナリズムを強調する点で改革派と共通しているため、アグスWK中将らが従来連携を模索してきたグループでもある。改革派の要職就任が困難になっている現時点では、ワヒド大統領も国軍での支持基盤を中間派に依拠せざるを得なくなっている面もある。

もう一つは「インテリ軍人」グループ。バンバン・ユドヨノ退役大将(政治・社会・治安担当調整相)とアグス・ウィジャヤ中将(国軍領域担当参謀長)が代表格だ。前者は米ハーバード大学から、後者は米国の3大学から修士号を取得している。国軍改革の考え方としては守旧派と改革派の文字通り「中間」に位置。国際社会との外交能力を持ち、国軍と政界との「橋渡し役」でもある。また、同グループの将官たちは政治思想的には「紅白(メラプティ)派」(注2)に属し、世俗主義を標榜する点ではメガワティ副大統領やウィラント大将とも共通性を持つ。闘争民主党(党首：メガワティ副大統領)に近いアグス・ウィジャヤ中将が副大統領とウィラント大将の連絡役になっていることは衆知の事実だ。副大統領とウィラント大将は、各々の政治的将来のためにワヒド大統領を政治的に牽制する点で利害が一致している。

ユドヨノ調整相は、言うまでもなくワヒド政権の「参謀長」の立場にあり、政権と議会・政党政治家との対立関係解消に努める一方で、国軍内に広範な政権支持基盤を造成する役目を担っている。国軍との関係に限れば、同調整相がワヒド大統領に現実に即した「用兵術」を指南できるかどうかは政権の将来に重大な意味を持つかもしれない。

アグスWK中将の「改革派」

【改革派】段階的な国軍改革を支持する将官は上述の中間派にも多く、その意味でここでの改革派は正確には「急進改革派」と呼ぶのが妥当だろう。議会の国軍割り当て議席の返上を含む国軍の民主的な改革を早期に推進することはもちろん、軍人の「旧式なメンタリティ」(アグスWK中将)の転換も求めてきた。旧来の国軍「主流派」からみれば「造反グループ」であり、守旧・中間両派と比べれば国軍内での勢力は小さい。中心になるのは「クロムポク(Kelompok)20」と呼ばれる20人の将官で、ほとんどがAkabriの1973-74年卒業生。その代表がアグスWK中将だ。その他には、サウリップ・カディ少将(前陸軍参謀長領域担当補佐官：現国軍司令部付)、ロムロ・シンボロン少将(前ジャカルタ軍管区参謀長：現国軍司令部付)がいる。

アグスWK中将を国軍改革の「急先鋒」にしようとしたワヒド大統領は、今年3月、同中将を陸軍の精鋭部隊Kostradの司令官に抜てきした。当時は改革派が国軍の新しい主流派として確立したかのような論調もあったが、同司令官は5カ月で更迭に追いこまれた。同中将がKostradの過去の汚職を内部調査したことで、守旧派から激しい反発を招いたことが直接の引き金になったとされる。また、その急進改革論には中間派からも苦情が出ていた。

確かに、ワヒド大統領は10月人事でアグスWK中将を陸軍司令官に就けることに失敗したが、これからも本音では改革派を支援していくことに変わりはないだろう。また、同派の強みは政党政治家、NGO活動家、学生運動家など国軍の外に広範な支持者がいることだ。

さて、ワヒド大統領と国軍の「チェス・ゲーム」における次の対局は、すでに定年(55歳)退役の年齢に達しているウィドド国軍司令官の後任と、10月人事で空席になった陸軍参謀次長ポストを埋める人事になる。国軍の政治的支持を取り付けるには中間派が主導する人事に大統領が満足することだが、10月人事の結果に激怒したといわれる大統領が果たして黙っていられるのかどうかだ。

(注1)この人事では、アクマド・スチプト海軍参謀長も解任され、インドゥロコ・サストロウィルヨノ海軍参謀次長が後任に昇格している。

(注2)昨年10月にワヒド政権が成立するまでの過程では、政界での二極化を反映して国軍内でも民族・世俗主義的な「紅白(メラプティ)派」軍人と、イスラム至上主義勢力の「緑(ヒジャウ)派」軍人という対立があった(99年3月1日号の本欄参照)。この思想上の対立軸は守旧派対改革派という「縦軸」を貫く「横軸」として現在でも潜在している。

〔人物データ・ファイル〕

■陸軍参謀長 Army Chief of Staff(KSAD)
エンドゥリアルトノ・スタルト大将
Jenderal Endriartono Sutarto

1997年6月から98年9月まで大統領警護隊長として、スハルト元大統領の政治的な「最後」を身近で見届けたことで知られるが、守旧派とは言い難い。むしろ、地元マスコミの報道では「兵士の中の兵士」などと形容されることが多く、政治色の比較的薄い「職業軍人」タイプの将官。従って「グス・ドゥル(大統領)派」、「メガ(副大統領)派」、「ウィラント(元政治・治安担当調整相)派」のいずれにも属していない。

しかし、闘争民主党(党首：メガワティ副大統領)に近いアグス・ウィジャヤ国軍領域担当参謀長と過去に深い親交があり、同(エンドゥリアルトノ)大将の陸軍参謀長就任は副大統領の政治路線には有利に働くとの見方もある。

▼ データ
【年齢】53歳
【生地】中ジャワ州プルウォルジョ
【学歴】
1971：国軍士官学校(Akabri)卒
(米国で空挺部隊およびレンジャー部隊の訓練課程に参加)
【経歴】陸軍戦略予備軍(Kostrad)Kujan 1 Brigif 参謀長
ビアク島駐屯部隊隊長
1993：ジャヤ軍管区(ジャカルタ)参謀長作戦担当補佐官
1997：[6月] 大統領警護隊長(少将)
1998：[9月] 国軍軍務担当参謀長作戦担当補佐官
1999：[12月] 国軍参謀学校長
2000：[3月] 陸軍参謀次長(大将)
2000：[10月9日] 陸軍参謀長
【歴任】第8ガルーダ部隊員(中東)、第9ガルーダ部隊員(イラク)
【趣味】テニス
【家族】アンディ・ウィダヤンティ(Andy Widayanti)夫人との間に3子
【横顔】
・性格は寡黙なことで知られる。前職の参謀次長時代には、陸軍内の規律回復と兵士のプロフェッショナリズムの確立を強調してきた。

■ 陸軍司令部付(前陸軍戦略予備軍[Kostrad]司令官)
アグス・ウィラハディクスマ中将
Letjen Agus Wirahadikusumah

米ハーバード大学で修士号を取得したエリート軍人で軍内急進改革派のリーダー格。ワヒド大統領の強い意向を受けて、今年3月に陸軍の最精鋭部隊であるKostradの司令官に抜てきされたが、5カ月後に同司令官職を解任され、閑職に異動になった。同中将が、国軍の「二重機能」を早期に完全解消することを主張し、軍内の守旧派だけでなく、段階的改革を主張する穏健改革派との溝を深めた結果だった。大統領が同中将を国軍の民主的改革の「急先鋒」にしたいとの意思は変わっていないようだが、現状で同中将が要職に復帰するには軍内に「敵」を作りすぎてしまったといえる。

▼ データ
【年齢】51歳
【学歴】
1973：国軍士官学校(Akabri)卒
(90年代に米ハーバード大学で公共行政学の修士号を取得)
(豪陸軍の軍事教練課程で学ぶ)
【経歴】
1996：国軍軍務担当参謀長総合計画担当次席補佐官
1998：国軍司令官政治・治安担当顧問
陸軍参謀学校長
1999：[1月] 国軍軍務担当参謀長総合計画担当補佐官
1999：[11月] ウィラブアナ(スラウェシ)軍管区司令官
2000：[3月1日] 陸軍戦略予備軍(Kostrad)司令官
[8月1日] 陸軍司令部付

タイ国軍（ＲＴＡＦ）の新指導部

〔人物データ・ファイル〕
（2000年10月１日発令の人事異動による）

■国防次官 Defence Permanent Secretary
タワット・ケタンクン大将
Gen Thawat Ketangkul

10月１日発令の定期人事異動で閑職の国軍最高司令部顧問から現職に昇格した。同氏の抜擢人事は、チュアン首相が制服組の意向に拠らずに行った「政治的決断」といえる。チュラチョムクラオ陸軍士官学校の第12期生で、同じ人事で国軍最高司令官に昇格したサンパオ大将（後述の［人物データ］参照、以下《ｐ》）、および1998年以来陸軍司令官職にあるスラユット大将《ｐ》とは同期生の間柄（国軍の３つの最高首脳ポストを同時期に陸士同期生で占めたのはタイ国軍史上はじめて）。

陸軍の実戦部隊を指揮する「実力者」、スラユット陸軍司令官とのもうひとつの共通点は、ともに80年代にプレム元首相（元陸軍司令官：現枢密院議長）の補佐官をしたことがあることだ（プミポン国王の「最高顧問」であり、陸士12期生の「後ろ盾」ともいわれるプレム氏の国軍人事に対する影の影響力は否定することができない）。来年９月で定年退役のため、任期は１年だけになる。

▼データ
【年齢】59歳
【学歴】チュラチョムクラオ陸軍士官学校卒（第12期生）
陸軍参謀学校卒
国防大学校卒
（この間、米国で特殊戦訓練課程に学ぶ）
【経歴】第６工兵大隊小隊長
第１特殊戦班班長
（ベトナム戦争時）長距離偵察中隊副隊長
第９歩兵師団作戦部次長
チュラチョムクラオ陸軍士官学校教官
陸軍訓練指揮局参謀
国防省総務局部長
国防省エネルギー局次長
国防省政策・企画室次長
国防産業エネルギー・センター次長
国防次官特別顧問
国軍最高司令部顧問委員会議長
2000：［10月１日］国防次官
【横顔】
・10月人事前にティラデート・ミーピエン（Theeradet Meepien）前国防次官（大将：定年退役）が後任に推薦していたのは、アーカデート・サシプラパ（Akradej Sasiprapa）前国防次官補（大将）だった。しかし、アーカデート大将は前回の総選挙で現野党・新希望党（チャワリット党首）を密かに応援していたこともあり、チュアン首相が同大将の政界との繋がりを嫌った。

■国軍最高司令官 Supreme Commander
サンパオ・チューシリ大将
Gen Sampao Chusri

10月１日の定期人事異動で国軍副最高司令官から第16代最高司令官に昇格。定年退役したモンコン・アンポーンピシット（Mongkol Ampornpisit）前国軍最高司令官（大将）の推薦に従った順当な人事といえる。

タワット新国防次官、スラユット陸軍司令官らと同じチュラチョムクラオ陸軍士官学校第12期の入学生だが、同校を卒業してはいない。実は、最初の学年で同期生の首席になり、陸軍の奨学金を授与されたためフランスに留学。従って、同国の陸軍士官学校を卒業している。タイ陸軍士官学校の卒業生でない将官の国軍最高司令官就任は極めて異例だ。

砲兵部隊出身ではあるが、機甲部隊出身で（汚職疑惑で辞任する以前は）政界のボス的存在だったサナン・カチョーンプラサート前民主党幹事長（前副首相兼内相：退役少将）と特に親交が深いことで知られる。しかし、同党党首のチュアン首相兼国防相とはそれほど親密な関係とは言えないようだ。。

▼データ
【年齢】59歳（1941年２月21日生まれ）
【学歴】チュラチョムクラオ陸軍士官学校入学（第12期）（フランスに留学）Saint Cyr 陸軍士官学校卒
【経歴】第２高射砲連隊第４大隊副隊長
1980：同大隊長
1982：第２高射砲連隊副隊長
1984：同連隊長
1990：高射砲師団長
1992：陸軍防空司令部司令官
1996：陸軍司令官補
1999：［10月１日］国軍副最高司令官
2000：［10月１日］国軍最高司令官
【横顔】
・同大将とともにフランスに留学したのが、次席の成績だったブーンロート・ソマタット（Boonrod Somatat）氏で、後者は今回の人事異動では陸軍副参謀長から同参謀長（大将）に昇格した。
・同大将とサナン前民主党幹事長は、1977年クーデター（未遂）の首謀者として処刑されたチャラート・ヒルンヤシリ（Chalard Hirunyasiri）大将の「副官」的存在だった。サナン氏はクーデターへの直接関与を問われ禁錮刑に処せられたが、同大将は処罰を免れている。
・98年10月の人事異動時には陸軍司令官補にあったため、陸軍司令官の最有力候補とされたが、チュアン首相が「政治色」の薄いスラユット上級専門参謀（当時）を司令官に抜てきした。それもあり、今回の人事で同大将を「順当に」最高司令官に昇格させることについては、同大将を支持してきたモンコン前最高司令官とチュアン首相との間に「紳士協定」があった。

■ 陸軍司令官 Army C-in-C
スラユット・チュラノン大将
Gen Surayud Chulanont

陸軍内では早くから有能で理論家の将校として知られてきた。98年10月、チュアン首相の意向で、「閑職」の上級専門参謀から国軍の最有力ポストである陸軍司令官に任命された時は異例の人事としてマスコミを驚かせた（10月の定期人事異動で留任）。その人事には、プレム枢密院議長の推薦が大きな影響を与えたといわれる。タイ陸軍を「政治的に中立」でプロフェッショナルな軍隊へ改革することが任期中の目標。

▼データ
【年齢】57歳（1943年８月28日生まれ）
【学歴】チュラチョムクラオ陸軍士官学校卒（第12期生）
【経歴】
1969：特殊戦訓練指導官
1971：特殊戦学校教官
1978：第23歩兵連隊第４大隊長
1980：陸軍作戦センター局長
1981：第１師団（バンコク駐屯）副参謀長
1982：第１特殊戦部隊（ロッブリ）司令官
1983：第１特殊戦連隊長
1986：国防次官室付参謀（少将）
1989：第１特殊戦師団長
1992：特殊戦司令部司令官（中将）
1994：第２軍管区司令官
1996：陸軍上級専門参謀（大将）
1998：［10月］陸軍司令官
【横顔】
・陸軍の政治的中立には厳格で、ソンクラン（仏暦の新年）にはチュアン首相（国防相兼任）にさえ挨拶にいかない。

■海軍司令官 Navy C-in-C
プラサート・ブーンソン海軍大将
Admiral Prasert Boonsong

10月の定期人事異動における「ダークホース」の一人。佐官時代に駐日海軍武官を務めた知日派である。定年退役したティラ・ハオチャルーン(Thira Haocharoen)前海軍司令官(海軍司令官)は、後任に個人的に親交の深いプリチャー・プアンスワン(Preecha Puangsuwan)副司令官の昇格を強く推薦していたが、チュアン首相は参謀長の同(プラサート)大将を抜てきした。さらに、海軍は派閥間の「暗闘」で知られるだけに、首相は同大将が新しい職責を果たしやすいように、同大将に事前に海軍の異動リストを示し、一部高官の人事を手直しさせたとも報道されている。

チュアン首相の海軍人事には、ワタナチャイ副国防相(退役大将：元国軍最高司令官)や国防相顧問のユタナ・ジェームパン(Yutthana Yaempan)大将なども100%の支持を表明したとされる。また、首相は海軍司令官経験者数人からも同大将を推薦する書簡を受け取ったようだ。首相が同大将の抜てきにこだわったのは、同大将が「自分は首相や(与党)民主党とは何の関係もない」と公言するほどの「職業軍人」であることだ。一部情報は、同大将も陸士12期生同様に「プレム(枢密院議長)人脈」だとしているが、同大将は「プレム大将は私の名前も知らないはず」とこれを否定している。

▼データ
【学歴】海軍士官学校卒(第7期生)
【経歴】駐日海軍武官
1998：[10月] 海軍参謀長
2000：[10月1日] 海軍司令官
【家族】ウアティップ(Uathip)夫人
【横顔】
・同大将とティーラ前海軍司令官との不仲は地元マスコミのよく知るところ。同大将が98年人事でティーラ大将の海軍司令官就任を支持しなかったことが原因らしい。両人の夫人同士の不仲も有名。

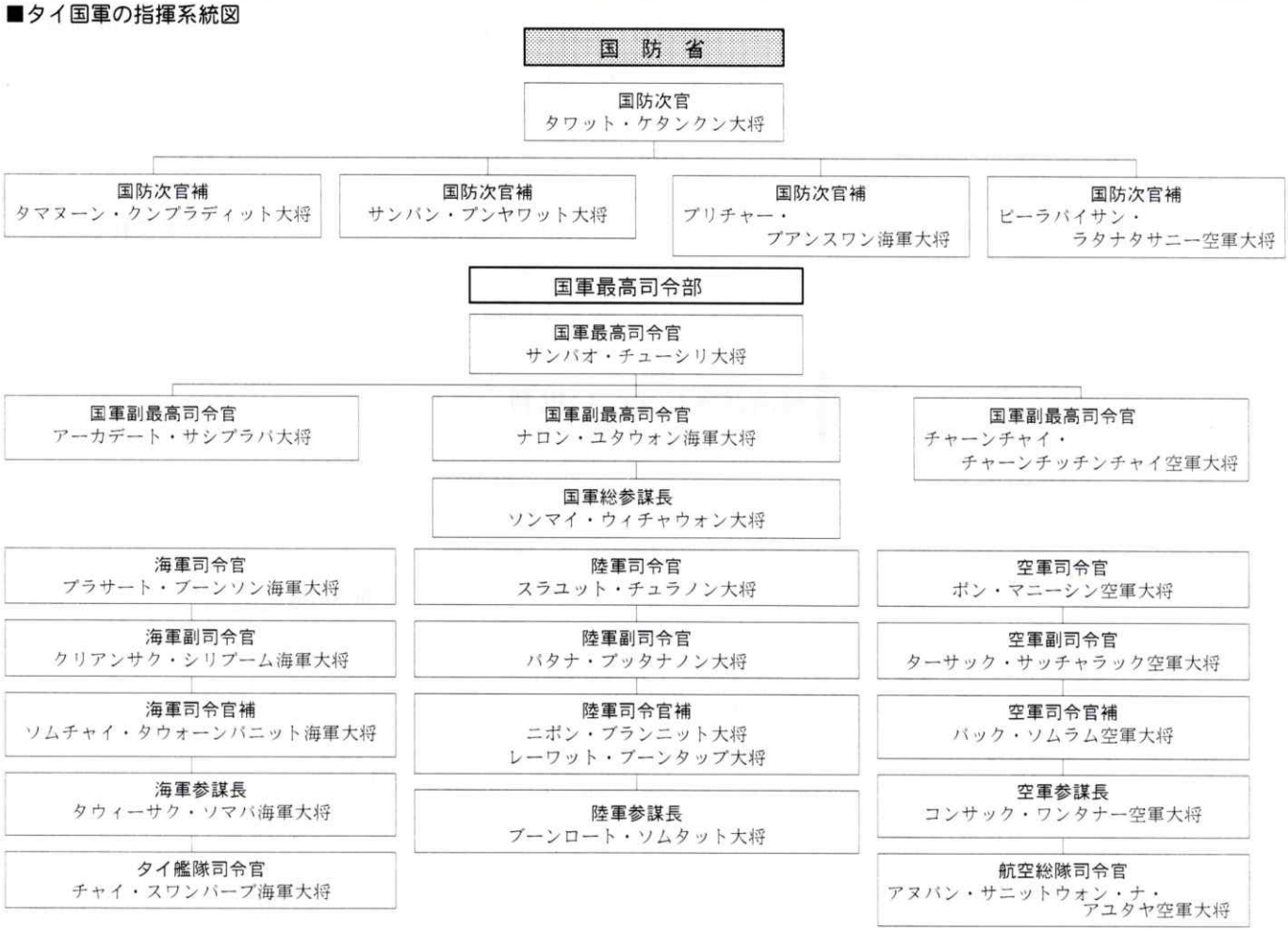
■空軍司令官 Air Force C-in-C
ポン・マニーシン空軍大将
ACM Pong Maneesilp

10月の定期人事異動で航空総隊司令官から現職に抜てきされた。この人事では、退役したサナン・トゥアティップ(Sanan Thuathip)前空軍司令官(空軍大将)とチュアン首相の考えに違いはなかったようだ。空軍でも「守旧派」と「改革派」の対立があり、同(ポン)大将は両派の勢力のバランスが取れる選択だったといってよい。実戦部隊での戦闘機パイロットとしての経歴が長い。

▼データ
【年齢】58歳(1942年3月18日生まれ)
【学歴】
1965：空軍士官学校卒(第9期生)
1979：空軍参謀学校卒(第23期生)
1991：空軍大学校(第25期生)
【経歴】パイロット(ウドンタニ、ウボンラチャタニ、チェンマイの各空軍基地)
航空監察本部安全部長
第41航空団副団長
作戦統制本部航空作戦部長
航空技術本部長
航空総隊司令官
2000：[10月1日] 空軍司令官
【家族】ポーントン(Pornthong)夫人
【趣味】園芸

〔既出データ〕
■モンコン・アンポーンピシット前国軍最高司令(99/10/15)
■ティラ・ハオチャルーン前海軍司令官(99/10/15)
■サナン・トゥアティップ前空軍司令官(99/10/15)

■タイ国軍の指揮系統図



(アジア政治アナリスト 勝田 悟)